

人類は富士山と

どう向き合っていていくべきか？

世界文化遺産に登録された富士山は、地球レベルの宝です。その富士山と人類はどう向き合っていくべきなのか？平成10年に制定された「富士山憲章」を行動規範に掲げる「ふじさんネットワーク」の増澤武弘会長に話を聞きました。



富士山の6合目、宝永第二火口付近に立つ増澤武弘会長。
この日は好天に恵まれ山頂まで視界が抜けていました。

ふじさんネットワーク 増澤武弘会長

美しい富士山を未来の子どもたちに

ふじさんネットワーク・増澤武弘会長のインタビューは、特定非営利活動法人「静岡自然環境研究会」の調査に同行する形で行われました。増澤会長は同会の理事長でもありません。

富士登山の玄関口として知られる富士宮口五合目駐車場に集合したのは増澤会長と静岡大学の学生、共同で調査を行う新潟大学の崎尾教授、大学院生、学生諸君の総勢12名。富士山自然休養林歩道を約40分歩いて、宝永第二火口へ向かいました。

途中にある溶岩流や割れ目火山の生々しい痕跡は、富士山が今も活動を続けていることを告げているようでした。

宝永第二火口に到着すると、眼前に1707(宝永4)年の大噴火によって形成された巨大な火口が広がります。人を拒絶するような荒々しい自然に圧倒されていると、増澤会長が語り始めました。「火口の中に

ポツポツと斑点のようなものが見えますね。あれはパッチと呼ばれるもので、あの中にある種が発芽し、やがて森林になります。宝永山の噴火から約300年が経ちますが、この一帯は火山の森林形成を知る上で、非常に貴重な新しい資料なのです。今日これから私たちが行う調査はその一環で、森林限界線に生えているカラマツ、トウヒ、シラビソなどの樹高や胴回りを測ります」。

調査は40年前に設定された10m×10mのコドラートと呼ばれる区画で行われ、その範囲に生えている木の構成種、樹高、胸高直径(円周)を寸ばさで調べます。この日は宝永山の第二火口の西側に設定した15区画が対象。調査は3人ずつの4班に分かれ、過去のデータと照合しながら、森林限界付近の植生変動を見ていきます。「この毎木調査は10年ごとに行ってきましたが、10年という短い期間で富士山を知ることができませ



富士山自然休養林歩道から見た景観。6合目付近までは森林と溶岩が混在した風景が広がっています。



標高2,693mの宝永山。3つの火口があり、山頂側から第一火口、第二火口、第三火口と呼ばれます。火口の内側に見える斑点が植物のPATCHです。



今回の毎木調査は宝永第二火口の西側で行われました。森林限界付近に生えているカラマツ、トウヒ、シラビソ、コメツガ、ダケカンバ、ナナカマド、ミヤマハンノキを観察することで植生の変動を調査しました。

変わったこと、 変わらないこと

おそろしく100年から1000年単位の年月を要します。ですから、私たちの責務は富士山をそのまま後世へ残すこと。登山客のごみ問題や外来性植物による植生変化など、富士山を取り巻く環境には様々な課題がありますが、最も大切なことは富士山の自然を末永く継承することです。ふじさんネットワークはそのために組織されました」と増澤会長は語ります。

富士山憲章は、日本の象徴である富士山を後世に引き継いでいくために、静岡・山梨両県によって平成10年に制定されました。これを周知、定着させていく仕組みとして生まれたのが「ふじさんネットワーク」です。会員は自然保護団体、NPO、企業、マスコミ、行政などで構成され、各会員はそれぞれの得意分野を生かして自主活動を行いながら、会員相互の交流・対話を通じてネットワー

ク内で連携を図っています。「清掃活動をする団体、自然林の復元を目指す企業、観光客対策を打ち出すグループ、環境キャンペーンを実施するテレビ局など、各団体の活動は多岐に渡りますが、目的は同じです。会員数は約500強の団体・個人（2018年現在）で、各々が富士山憲章を行動規範としています。他県のグループも多少いますが、大多数は静岡県に拠点を置く団体や企業です」。

コドラートの足元は細かな砂利で滑りやすく、傾斜も急峻であるため、作業は容易ではありません。調査班はそれぞれにメジャーやノギスを携行し、10年前に木にくくりつけた標章をチェックしながら、すべての樹木を調査していきます。「この調査をしていると10年がとても短い時間であることが分かります。人にとっては長くても、自然界ではあつという間なのです。現在、地球レベルの気候変動などと騒がれています。それは人間の尺度で測った推測で、早計に判断することはできません

ん。ですから、今の私たちがすべきことは正確なデータを集積しながら、富士山を「あるがまま」に後世へ引き継ぐこと。それが将来、正しい判断をする礎になります」。

年間に20回ほど富士山で調整するという増澤会長。「最近の富士山は変わったのか、とよく質問されますが、自然レベルで見たら、この数十年で変わったことはほぼありません。ただ、世界遺産で湧いたブームも落ち着き、一時は年間30万人と言われた登山客は約20万人になりました。清掃活動や自然保護の啓発も進んで、ごみも随分減りましたね。トイレの尿処理も同様で、これは良い傾向です。ただ、私たちの目的は富士山を後世へ引き継ぐことですから、それを見据えた上で、持続的な活動を続けることが重要です」。

何よりも自然に感謝し、あるがままの自然を後世へ残すこと。増澤会長の願いは「私たちが富士山とどう向き合うべきか」を問いかけるものでした。



増澤 武弘氏 ますざわ たけひろ

プロフィール

1945（昭和20）年生まれ。静岡大学客員教授。富士山の植生研究の第一人者。特定非営利活動法人「静岡自然環境研究会」理事長。平成27年、「ふじさんネットワーク」の会長に就任。南アルプスユネスコエコパーク登録時には検討委員会の委員長を務める。著作物は『世界遺産の自然の恵み』（日本生態学会刊）、『高山植物学』（共立出版社刊）、『富士山 自然環境と植生』（静岡県）、『富士山頂の自然』（静岡県）など。



10年前の毎木調査時に付けられた標章。これを元に過去のデータを読み出し、現在の状態と照合していきます。



コドラートに集まった調査班。黄色いパーカーを着ているのは新潟大学農学部崎尾均教授です。一般登山客のコドラートへの進入は禁止されています。